

松になつたとんび

横山奈津紀

絵 小野七絵



その日の朝、尾道の空はよく晴れていた。とんびのトビタロウはいつものように羽をうーんと伸ばして風をつかまえると、空へ飛び上がった。ねぐらの山から海へ向かって降りていき、福善寺が見える辺りまで来ると輪を描いて飛んだ。賑やかになっていく朝の尾道をゆっくり眺めながら、風まかせに海まで出ていくのがトビタロウの日課だ。



とんびの目はよく見えるから、高い空からでも町の様子がよく分かる。坊さんや港の力自慢の男たちが、トビタロウのずっと下でせわしく動き回っている。

トビタロウは飛ぶのが一番好きだった。飛んでいる時だけは、自分が強くて美しい鳥のように思えた。

「今日も、ええ風じゃなあ」

ほさほさの茶色い羽であたたかい風を抱きかかえるようにして飛びながら、トビタロウはのんびりした声で言った。

すると、急に荒々しい風が横からぶつかってきた。胸をくすぐっていたあたたかい風が逃げそうになって、トビタロウは慌てて羽ばたきながら見回した。すぐ隣に並んだのは大きくて立派なわしだった。わしはぎろりとトビタロウをにらみつけた。

「ぼけっと飛んどるなよ。邪魔じゃ」

わしが力強く羽ばたくたびに風が乱れ、ト
ビタロウはのんびり飛んでいられなくなった。
トビタロウはそそくさと逃げだした。



わしが見えなくなると、今度はしらさぎに
出会った。

「きれいでないねえ、あんたあ。かわいそうに」
日を浴びてきりきりりとひるがえる白い

羽に見とれていたトビタロウは、そう言われ
て自分の羽を見た。くすんだ茶色の羽はほと
んど手入れもしておらず、頭のてっぺんの羽
は風にあおられてくちやくちやになっていた。

しらさぎの笑い声が聞こえなくなるまで離
れて、やっとトビタロウはため息をついた。

「まあええか。ほんまのことじゃもんな」

悲しい気持ちがあったけれど、ぴいよろーと
一声鳴くとトビタロウは少し元気になった。

夕方になって、空が曇り始めた。雷の音が
して、分厚い雨雲が広がった。

トビタロウのくちばしに雨つぶが落ちた。
落ちたと気づいたとたん、あつという間にひ
どい嵐になった。

「こりゃいけん、早う帰ろう」

福善寺の上まで帰ってきたとき、トビタロウはお寺の境内にだれかいるのをみつけた。とんびの目はよく見えるけれど、どしや降りの中ではそうはいかない。地上のだれかは、雨に打たれたまま、そこから動かない。心配になって、トビタロウは地面に降りてみることにした。

境内の地面は雨でぬかるんでいた。トビタロウの足にも泥がたくさん跳ねてきた。

「こんなところにおつたら、風邪ひくで」

泥まみれのだれかに、トビタロウは声をかけた。返事は、ちよつと遅れて返ってきた。

「だって、だって動かれんのじゃもん」

顔だけ向けて言ったのは、ねこだった。ねこは強い風で転んでしまって、そこから動けなくなってしまうのだと言った。

「そんなら、お堂の下まで連れてつたる」



ところが、ずぶぬれのねこをお堂の屋根の下まで連れて行くこうにも、トビタロウは飛ぶことができなかった。とんびは風をつかまえないと飛べない。嵐の風は、トビタロウをひっくり返そうと暴れるばかりで、ちつともおとなしくしてくれなかった。

ねこを押したり引いたりして、どうにか動かそうとするけれどうまくいかない。風はますます強くなった。トビタロウも立っているのがやっとだ。

「やつぱり無理じゃ」

ねこは諦めたような声を出した。トビタロウは何か考えているような顔で空を見た。

「すぐに晴れたらええけど。さ、おいらの羽の下へおいで」

トビタロウはそう言って、ねこの上に片方の翼を開いてやった。ねこはとても喜んだ。

どれくらいたっただろうか。嵐はやむどころか、しだいにひどくなってきた。

ごうごう鳴る風の音にまぎれて、トビタロウは別の音を聞いた。

「見てみい、とんびさん。あっちにんげんがおる」

ねこも気づいたようだった。ずぶぬれの着物をしぼりながらトビタロウたちの方へ、そのにんげん、七つくらい歳の女の子はやって来た。嵐の中で福善寺の階段を上ってきたからだろう、すっかり疲れた様子だ。女の子は、トビタロウの羽の下を覗き込んだ。ねこが言う。

「お堂で雨宿りしたらどうじゃ、お前は行けるじゃろ」

女の子はうつむいた。トビタロウは何も言わず、閉じていた方の翼を開いた。茶色いぼさばさの羽をきれいにそろえて、傘のようにした。女の子は嬉しそうにトビタロウの羽の下にもぐり込んだ。ちよっぴりあまもりがするけれど、あたたかい傘だった。

「あたしね、お堂にあがっちゃだめなの。おっかさんがそう言ってた」

トビタロウは首をかしげた。

「貧乏だし、よそ者だから」

女の子はつきはぎだらけの服をぎゅっとしぼった。



嵐の中、トビタロウは耐えた。地面にしつかり足のつめを食い込ませて。

女の子の後にも、だれかが羽の下で雨宿りを始めた。だれが来たかは、もうトビタロウには分からなかった。雨宿りをする者はどんどん増えていく。トビタロウはだれか来るたび、羽を大きく広げた。それでも荒れ狂う風は、翼の下の者たちをさらおうとする。

（こいつらに怪我あさせたら、風よ、おいらが許さんけえな）

トビタロウがそう思っていると、ぼさぼさの羽のひとつひとつが上を向いて、針のようにとがり始めた。

（風よお、早うあっちへ行ってくれえ！——）



夜が明けた。トビタロウは朝日が眩しくて目を覚ました。風も雨も、すっかりどこかへ去っていた。一晩中広げたままだった翼の下から、ねこが呼びかけた。

「とんびさん、動けるんかい」

だけでも無理だった。トビタロウは、すっかり松の木になってしまっていたのだ。



女の子も心配そうにトビタロウを見上げた。トビタロウはというと、疲れきって早く翼を閉じてしまっていた。両方の翼は立派な松の枝になって、閉じようにも動かさなかった。

それなのに、力を抜けば地面に打ち付けて折ってしまいそうだった。

どうしたものか、とトビタロウが思っていると、女の子が小石や木の枝を運んできた。ねこも元気を取り戻し、雨宿りをした者たちと一緒に嵐で散らかった石などを集めてきた。そして持ち寄った物を積み上げて、トビタロウの羽の支えを作った。

トビタロウはようやく肩の力を抜くことができた。雨の雫にぬれた松の葉は、朝日を浴びてきらりと輝いていた。



それからというもの、トビタロウは福善寺の境内の端で、静かに尾道の町を見下ろして暮らすことになった。ねこや女の子たちが思いを込めて作った支えは、飛ぶのに使っていたあたたかい風よりもやさしく、トビタロウの体を支えていてくれた。トビタロウは松になっても、昔と同じように空を飛んでいる気分だった。

いつの頃からかトビタロウは、その立派な姿から「わしの松」と呼ばれるようになった。枝が伸びると、町の人たちも新しい支えを持ってきてくれるようになった。

これが、福善寺にある「わしの松」の、ずうっと昔のお話。



今でも松の木はこう思っているんだって。
(ほんとはとんびなんじゃがのう、まあええか)